

幼兒童話の特殊性

聖美幼稚園 内山 憲 堂

序

童話を話す場合、童話を論ずる場合、童話を取り扱ふ上に一番大切なことは年齢を基礎とすることである。年齢を無視して童話を話し、童話を論ずることは、目隠しをして真剣勝負をするよりも危険である。幼兒には幼兒の心理があり、幼兒の語彙があり、少年には少年の心理があり、氣持ちがある。

幼兒童話が今日まであまり等閑にされすぎてゐるが、幼兒を取り扱ふ者のすべてが、これに留意し、これの研究と實踐に進まなければならぬと思ふ。

本誌編集部からの御依頼があるまゝに、極めて簡単に、幼兒童話の特殊性について述べることにする。

一 不合理性

不合理性とは現實を離れ、非科學的非現實なことであつて、實際に於ては出来ないことである。例へば桃の中から子供が生れたり、狼と蟹とが話をしたり、寝てゐる狼のお腹を鋏で切つて、喰べられてゐた子供を出してその代りに石を入れて、縫ひ合しても、狼は目を醒さないで寝てゐる云ふやうなことである。

この非現實は幼兒の場合には許されるものであつて、幼兒はその非現實を、一向に非現實とは考へないのである。これは主として彼等の想像力の働きが旺盛なためである。

彼等自身の日常の生活を見ても、その行動、言語中には現實ミ空像ミが常に混合してゐることを知るであらう。想像の世界は幼兒のみが住むこゝの出来る、最も自由にして、最も大きい天地である。徒に大人の考で「科學的に」童話を取り扱つたら、實にひからびた人生なるこゝであらう。

二 誇張

幼兒は童話中の人物について、その極端であるこゝをよろこぶものである。大きいものは非常に大きく、小さいものはうんこ小さく強い者はこゝでも強くなければならぬ。

桃太郎や金太郎はこゝまでも強く、みんなこゝがあつても決して負けるやうなこゝがあつてはならない、一寸法師は小さければ小さい程、幼兒は興味を感じるのである。

それから人物の個性が極端で誇張的でなければならぬ。悪人は常に悪く(但し最後に善人にする)善人はこゝまでも善人であつて、「善人であつたけれど、義理のために悪行爲をした」云ふやうなこゝは幼兒童話には適さない。

誇張法は一種の修辭であつて、古來より多く用ひられて來た「白髪三十丈」「天地に響く大音聲」「怒髪天を衝く」の如きもや馬太傳の「富める者の神の國に入るよりは駱駝の針の穴を通るは却つて易し」の如きこれである。

川柳ではこの誇張法を上手に使用してユーモアな味を見せてくれてゐる。

祭から戻るミ連れた子をくばり

傀儡子十里程來た立すがた

張物をいけきりにする俄雨

武藏坊水車程しよつて出る

大三十日首、でも取つて来る氣也

三 韻律的

幼児童話にはリズムが必要である。リズムとは音の高低の反復であつて、「桃がドンブラッコッコスッコッコ流れ来ました」か「鉄でチョッキンチョッキン、チョッキンチョン切りました」か云ふが如きである。

幼児は實にリズムを好むもので、幼児が童話を好むのは、そのリズムに興味を持つが故である。

擬聲や模聲も一種のリズムで現はされる場合が多いから大に取り入る可きである。それから子供の遊び歌（天神様の細道、子取るなご）や民謡や童謡なごを話の中へ取り入れることは必要である。

童話を聞き始めた幼児は、殊にリズムを中心とした部分的な興味を持つものである、故に話全體の筋に、小々不合理なところがあつても、そんなことには關心を持たない。

幼児が同じ話を何回しても聞くのはこれがためである。「先生、その話は一度聞きました」か「そんなことがあるのですか」か聞くやうになつたら、もうリズム愛好期を離れて筋に興味を感じるやうになつて來たのである。

四 反復

反復も一種のリズムを見るこゝが出来ゝる。反復には言葉の反復と筋の反復とがある。

言葉の反復と云ふのは同じ言葉が繰り返へされるものであつて「桃太郎」の話にすれば、鬼征伐に出かけるこゝ、犬が來て「桃太郎さん桃太郎さんごちらへおいでになりますか」「鬼が島へ鬼征伐に」「お腰のものは何んですか」「日本一の吉備團子」「一つ下さいおこもします」「そんならやるからついて來い」か吉備團子を貰つて行く、次に猿が出て來て、犬と同じ言葉を繰り返して吉備團子を貰つて行く、次に雉が來て、同じ言葉を繰り返して吉備團子を貰つて行くのである。大人の場合には

最初の一つだけで後は略されるが、幼児の場合は同じ言葉が反復されることに興味を持つのである。

筋の反復は一郎、二郎、三郎が同じ行爲をしたり、同じ事件が繰り返へされたりするもので「三疋の小豚」や「イワンの馬鹿」「三疋の熊」の如きものである。

言葉の反復に當つては出来るだけリズムカカルに、筋の反復に當つては事件を出来るだけ同じ言葉によつて表はして行くことが必要である。

五 明快性

幼児の童話は明るく朗らかでなければならぬ。朗らかであれ云つて、單に、面白い態度や、變な言葉によつて笑はず云ふことではない。話者自身の氣持を明るく持つことによつて話が明るくなるのである、心配事があつたり、病氣で元氣がなかつたり、不平を持つたり、いや／＼話をしたりすることはいけない。

童心を持つて話さなければならぬ、童心は成人の心理の中に消え残つてゐる兒童時代の心理生活の遺跡である。童心は誰の心にも、氣づかれないやうにかくれてゐる、誰れでも童心を持つことが出来る、童心を持つ云ふことは子供の心と融け合ふことである。

話の筋にも明快さを必要とする、殘忍な話、センチメンタルな話、憂鬱な話などは絶対に禁物である。幼兒童話に於ては必ずハッピーエンドであることを要す。即ち善人は榮え惡人は改心してめでたしめでたしで終結しなければならぬ。

六 單純性

幼兒童話は出来るだけ單純でなければならぬ、單純にするためには、

1、筋が錯雜しないこと

込み入つた筋ではいけない、どこまでも主人公を中心として事件が進んで行き、本幹から枝が澤山に出ないやうにする必要がある。

2、出場人物を少く

出場人物は出来るだけ少数にする必要がある、中心として活躍する人物は三人か五人止りであつてほしい、ここに名前のついでである人間にあつては、出場人物が少くないで、人名が混同する憂がある。

3、人名、地名の簡略化

人名や地名で幼児には解り難いやうなものは、省略して、覚え易いやうにしなければならぬ、例へば「ヘンゼルとグレーテル」の如きは「平太さんミテル子さん」云ふ風にするとか、「お釋迦様はルンビニーでお生れになつた」云つても幼児には覚えられない、「美しい花園でお生れになつた」云ふ方がよいのである。

七 直観性

幼児童話は直観的であり具體的でなければならぬ。即ち平易な描寫を必要とするのである、言葉にしても幼児が日常用ひる、幼児の言葉がお話には一番適するのである。それと共に抽象的な言葉とか難解な言葉、漢語等は用ひないやうにしなければならぬ。ウォルター、ペーターは「汝が語らんを欲する所のものは、これを最も簡素な最も直接的な、最も正確なる方法によつて言ひ表はせ」云つてゐる。

ゼスチュアールも出来るだけ直観的な表現をしなければならぬ。

八 親密性

幼児に親し味を有するものを持つて内容が作り上げられなければならない。童話は児童の生活である、幼児童話は幼児

の生活である、彼等の生活範圍に於て描かれた話でなければならぬ。

幼児の經驗は大人に比べて非常に少い、しかし鮮少であるだけ、經驗事象に對して大人より以上によるこびに親し味ミを持つものである、それ故童話の内容に於て親密性が多ければ多いだけ幼児の興味は大なるものである。

出場人物にしても、幼児の熟知し親し味のあるものがよい、即ち幼児に親し味のある動物——兎、猿、犬、鳩、猫の如きもの、幼児ミ同年配の子供、又は老人なきが選ばなければならない。

「キャザー」は次の様な實例を示してくれてゐる。

ニューヨークのある有名な童話家が、アンデルゼンの「醜い家鴨」の話をした、筋も面白く話し方も實に巧妙であつたけれども子供たちは何等の興味も持たなかつた。この話者の失敗の原因ミ云ふのは、ニューヨークの中央の子供たちは家鴨に對して、實感を持つてゐなかつた、即ち家鴨の生活は未経験の世界であつたからである。

幼児を取り扱ひ、幼児に日常接する者は、幼児の經驗範圍内の事項をよく知つてゐる。常によく幼児を観察すれば我々は幼児に教へられる澤山の事があるのに氣がつくであらう。

九 活動性

幼児は自發活動の旺盛な時期である、故に童話に於ても、彼等の活動性を満足させるやうな變化を必要とするのである。童話の活動を構成する要素について考へて見るこ。

1. 人物の活躍

こゝに主要人物(主人公)が常に活躍してゐなければならない、「桃太郎」「かちかち山の兎」「狼ミ仔山羊」の一番小さい山羊等内外の話を見てもよく活躍させてゐる。

2、筋の變化

事件が次から次へ進展して行かなければならない、筋の進展には漸進法を用ひ小から大へ進ませることが必要である。そして想像的要素と神秘的要素と驚異的要素と冒險的要素と滑稽的要素が適宜に加味されて話を美化しなければならない。幼児の話は谷間に咲いた一輪の白百合の美ではなく、春の野に咲き亂れた菫、蒲公英、蓮華草でなければならず、そうすれば幼児は花の中を自由に駆け、寝ころんで思ひ切り春の自然の懐にいだかれるよるこびに浸るであらう。

3、表現上の變化

表現上の變化としては音聲の變化とゼスチュアーである、變化のない單調な音聲は(イ)厭かせる、(ロ)興味をなくする、(ハ)注意力をなくする、(ニ)疲勞の程を強める、等の不利がある。音聲の變化を長短、高低、強弱、緩急なき自由、そして自然に使用しなければならない。それと共に對話法、擬聲、模聲、ポーズ(間)等を上手に用ひ、これを助けるに變化あるゼスチュアーを附加されて話を立體的ならしめなければならない。

十 詩的正義(道德性)

童話には詩的正義を必要とする。ここに幼児童話には必ず含まなければならない。童話にありては正しき行爲は褒賞せられ、邪惡なる行爲は必ず責罰せられなければならない。この道義的な理法が嚴然として確立せられることによつて兒童は情緒的満足と道德的満足を感じるのである。

勿論童話は生活であり人生の縮圖であるから話中に善人も出れば悪人も現はれることがあらう、嘘をつく子供も出れば、盗人も出るであらう、しかし、最後に於て、悪人は必ず失敗をするか、改心するかさせなければならないのである。

これが童話の道德的であり、教育的である所以である。「これだから皆様も狼の様に悪いことをしては……」なきも強ひ

て教訓を附與する人があるがこれは詩的正義が童話に存在する以上無駄なこゝである。

それから童話はその成立に於て未開人の信仰から生れたものであるから、可成り現代の道德から見て正道を外れてゐるものがある、例へば「かちかち山」の如き殘忍性を有するもの、「ヘンゼルとグレーテル」の如き繼子いぢめのもの、なごは之であるが、これはその時代の道德觀念からは左程、惡徳を見られてゐなかつたにちがひないが、現代には容れられないこゝである、この點は大に注意して改作を加ふ可きである。

今一つ考へなければならぬこゝは國民性云ふこゝである、これは幼兒童話に限られたこゝではないが外國童話を取り扱ふ上に我國民性ミ合はないものや、我國體ミ相容れざるものがある。外國の王様の觀念はそのまゝ日本に持つて來るこゝは非常に危險な場合が多い、故に外國の話をする場合我國情に合ふやう改作する必要がある。

結 び

以上十項に渡つて幼兒童話の特殊性を略述したのであるが、幼兒を取り扱はれ、幼兒童話をなさる方は、この特殊性を生かして、幼兒童話に一層の働きミ美しくさを加へていたゞこゝを念願して筆を擱く。